

悩み、迷う日々

藤原 睦子

岩手県立衛生学院助産学科教員

私が助産婦となって13年がたちました。年月は重ねてはいるのですが、それ相応に助産婦として成長を重ねているのか、自問する日々です。自責の念と自戒をこめて、今までの自分を振り返ってみることにしました。

未熟だった勤務助産婦時代

私が看護学校を卒業する際、助産婦を志した理由には“まだ働きたくない”というモラトリアムの思考もあったのですが、独自に診断しケアすることができ、開業もできるという助産婦の専門性に魅かれたことがとても大きかったです。

そしていざ助産婦として働いてみると、自分で分娩経過を診断し予測しながらケアすることが、楽しくて仕方がありませんでした。3、4年もたつと、私はだいぶ奢ってしまって、まるでミニドクターでした。検査データやモニタリング所見に頼り、分娩介助中に胎児心音が下がると、酸素吸入を指示しクリステレルを指示していました。

しかし所詮、助産婦はドクターではありません。助産婦として6年が過ぎた頃、お産の経過は覚えていても、産婦さんの名前や顔が思い出せなくなり、感動することが少なくなってしまいました。これでいいのか、何かが違うと、もやもやとした思いを持ち始めていました。

1枚の葉書

ある日、1枚の葉書が届きました。私が助産婦になりたての頃、お産を介助した方からでした。引っ越しの通知とともに、「助産婦という仕事は

すばらしいですね」と書かれてあったのです。

目からうろこが落ちた思いでした。助産婦である自分が助産婦という仕事の素晴らしさに気づかず、お産を経験した産婦さんがそれを知ってくれていたのです。

ちょうどその頃、『助産婦雑誌』で“産婦とともに響き合う助産をめざして、院内助産所を開設する”といった内容の記事を読みました。はっとしました。どうやら私は、助産婦だからこそできるケアを見誤っていたようです。自分は医療者本位の自己中心的な助産を行っていたのだと、初めて気づかされました。

その後私は、助産婦養成所へと配属になりました。養成所では、いままでの自分が行ってきた助産を反省することしきりでした。そのため、学生に自信をもって助産について伝えることがどうしてもできませんでした。

そこで上司の計らいにより、厚生省の看護研修研究センターで1年間の勉強の機会を与えていただきました。センターでは学生間で各自の看護観や助産観を徹底的に議論し合うことができました。その中で、助産婦はお産のプロであるという当たり前の事実を再確認できたのです。自然なお産をいかに自然な経過で終わらせることができるか、妊産婦に寄り添い、母と子をサポートするという助産婦の仕事の原点を思い出したのです。自分がそのような素晴らしい仕事を任されているんだ、母と子とその家族の健康をも預かっているんだと思う時、真摯な気持ちを持つことができました。



助産教員の今

現在私は、教員をしています。いつか学生に「助産婦を選んで良かった」と言ってもらいたいと思いつきながら指導しています。ただその思いがうまく伝わらず、空回りすることもしばしばです。

ある時、学生が初めての分娩介助に当たる際、導尿をすることになりました。演習では何度も行なっていますが、実際の導尿は看護学校時代に1度しか経験していません。学生の緊張が手にとるように伝わってきます。何をどこから持ってきて、どのように処置していったらよいのか分からないのです。そこで私は、「膿盆を持ってきて」、「消毒セットとカテーテルをそろえて」、といった具合に声をかけていました。すると、「過保護すぎる」とスタッフから指摘を受けてしまいました。一から十まで声をかけていることが、学生を過保護にしていると思われたのでしょうか。しかし、緊張している学生が、次の行為が分からないことでさらにプレッシャーを負う必要はないと思ったのです。学生は、誘導してもらいながらも最初の経験ができたなら、次に恐怖感など持たずにケアができると思うのです。

学生を見守るべき時と指示すべき時、その見極めが難しく、試行錯誤を続ける日々です。

これから

私は現在夜間大学に通っていますが、2人の先生の教授方法の違いから気づいたことがあります。

年配のA教授の講義は講義内容と何ら関係がないような話題によく脱線します。若いB助教授の講義は、ノートをとれば綺麗に書けるといった具合に整理された授業展開です。ここが大事、このことが問題、解明されていない点といった具合に、いつもまとめてくださいます。学生の立場でみれば、B助教授の講義はノートもとりにやすく分かりやすいのですが、授業に遊びがないというか、自分で取捨選択するゆとりがありません。自ら考えたり他の書物に当たってみようという気にならないのです。結局、自分なりに学習できたといえる授業はA教授のほうだったのです。

助産婦学生と大学生では立場が異なり、知識や技術の習得方法も違うので、一概に比べることはできないのかもしれませんが、教える側の余裕や遊び心も大事なのだと気づきました。

様々な場面で、自分の一方的な思いを話すだけでは他者との関係性は築けません。ともに響き合える関係を学生や産婦さん方と培っていくには、他者を受けとめることのできる心と、肩肘はらずに今を楽しむ余裕も大事なのかもしれません。

地に足がついていないとよく評される私ですが、悩んだり迷ったりしている今のこの瞬間を、いつも大事にしていこうと思います。

今回は、新婚なのに助産教員として忙しい毎日を送っている小川さん改め、市毛啓子さんにバトンを渡します。